

目的 本編では、前編までの考察に加え、住生活のもう1つの公的行為である接客の実態を分析し、だんらん空間との関わりや問題点を考察することとする。

方法 前年度と同じ

結果 (1)接客の実態と評価 来客の質を「改まった客」と「親しい客」とに大別すると客種構成に違いが認められ、前者には仕事客、後者には友人が多い。親せきは両層にまたがっており、多様な対応の必要性を示唆している。また接客の場も前者は接客室へ、後者はだんらん室へといった使い分けが、現状・希望共定着している。また改まった客を家族のだんらんの場から排除しようとする要求が強い。(2)接客観 接客に関する意識を「だんらん室での接客」「接客する人」「客層による接客室分離」「客室の常設」「システムキッチンでの接客」の5項目で捉えると、第1項目は否定的評価に偏っているが、他の項目は分散的評価がみられる。この接客観の反応特性から、「接客分離型」と「接客未分離型」を類型すると、概ね5対4となる。前者では、実際のだんらん室・接客室の独立専用性が高い。

(3)接客のタイプ化とだんらん空間 客層と来客の相手から来客の性格を4タイプに分けると、タイプ毎に接客空間に求められる機能に違いのあることが指摘できる。このことは、接客空間の確立に多様な対応が必要であることを示している。(4)まとめ だんらん空間の姿は、その住宅の物理的条件や家族の生活状態により決定されると同時に、住み手のだんらんに対する意識によっても大きく拘束されている。また、だんらんには家族以外の者に対する排他性もあるため、公私の2面性に正しく対応した、だんらん室の確立が重要である。